
「令和元年度 飼料用米多収日本一」 受賞者の取組概要

【単位収量の部】

農林水産大臣賞

政策統括官賞

全国農業協同組合中央会会長賞

全国農業協同組合連合会会長賞

協同組合日本飼料工業会会長賞

日本農業新聞賞

1 相澤 正之（奈良県）

2 福士 正弘（青森県）

3 出島 博昭（秋田県）

4 農事組合法人ふながわ（代表者 由井 久也）（富山県）

5 上田 隆（秋田県）

6 小松田 光二（秋田県）

【地域の平均単収からの増収の部】

農林水産大臣賞

政策統括官賞

全国農業協同組合中央会会長賞

全国農業協同組合連合会会長賞

協同組合日本飼料工業会会長賞

日本農業新聞賞

7 株式会社アグリイワナガ（代表取締役 岩永 新一郎）（佐賀県）

8 牟田 基治（佐賀県）

9 株式会社M's green（代表取締役 松永 浩二）（佐賀県）

10 梅崎 聖人（福岡県）

11 筑紫 東治（佐賀県）

12 溝口 康博（佐賀県）

1 あいざわ まさゆき 相澤 正之（奈良県奈良市）

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
べこあおば	約1.1ha	940kg/10a	427kg/10a(513kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族(常勤:本人、農繁期の期間雇用(家族、パート))で農業を経営する専業農家。
- 水稻専作で、経営面積9ha

【作付品目】

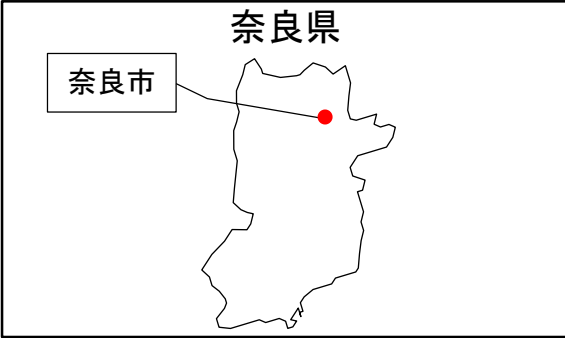
- 主食用米
あきだわら、コシヒカリ等 7.5ha
- 飼料用米
べこあおば 1.1ha

【取組のきっかけ】

- 6年前に就農し、50aの農地から稲作経営を始めたが、近隣農家の高齢化もあり現在は約9haまで規模拡大を図っている。主力品種「コシヒカリ」の販売先の確保が難しかったこともあり、平成28年産から安定的に販売できる飼料用米に取り組む。

【取組概要】

- 当初から多収品種である「ホシアオバ」や「モミロマン」を作付けしていたが、令和元年産から、地域の気候に適応性のある「べこあおば」に品種を変更。
- 肥料については、一発肥料(36%-5%-5%)を導入し、追肥を行わないことにより労働時間の削減を図った。
- 生産コスト削減のために、①刈取時期を5日程度遅らせて、水分19%程度に立毛乾燥させることで、登熟を進め(10kg/10a収量増)乾燥費を低減(10%)②田植え時の除草剤投入と、カメムシ防除として畦畔の草刈りを行うことにより薬剤費を低減③調製後、自家倉庫にて保管し、フレコン出荷により保管コスト削減、等の取組を行った。
- JA青壮年部のネットワークにより日頃から、経営面や技術面の情報交換を行い単収向上に務めている。



品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
みなゆたか	約1.7ha	938kg/10a	262kg/10a(676kg/10a) [※]

※作況補正後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人及び妻)
※田植え期に臨時雇用あり
- 米単作の専業農家

【作付品目】

- 主食用米:
まっしぐら、青天の霹靂 2.6ha
- 飼料用米:みなゆたか 1.7ha

【取組のきっかけ】

- 転作作物導入を検討していた際、主食米と同じ機械や施設を利用でき、交付金を含めた飼料用米の収益性に着目。飼料用米を利活用する地元養豚業者の(株)木村牧場からの勧めがあり、平成29年産から飼料用米に取り組む。

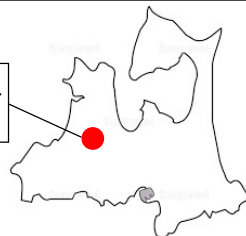
【取組概要】

- 鶏糞及び豚肥堆肥(700kg/10a)を利用することで肥料コストの低減と土作りを実施。飼料用米の出荷先である(株)木村牧場の堆肥を活用することで耕畜連携を実践。
- 種子の温湯消毒、令和元年産からは植栽密度を慣行70株から60株に切り替えるなど生産コストの低減を進めている。
- 元肥に窒素成分で10a当たり7~8kgを施用するとともに、幼穂形成期を基本に生育状況を見ながら、2~3回に分けて追肥(窒素成分で8kg/10a)を実施。追肥には速効性があり安価な「尿素」を使用することで資材コストの低減を図っている。
- 地域の農家と共同運営するコンバイン、乾燥・調製施設を利用。平成30年産からフレコン詰め設備を新設するなど流通コストの削減にも取り組んでいる。また、玄米出荷から粳バラ出荷への変更による更なる流通コストの削減を検討している。
- (株)木村牧場が開催する講習会に参加し、飼料用米生産者との情報交換、講習会での技術指導等を参考に飼料用米栽培技術の研鑽に努めている。
- 飼料用米は更なるコストの低減により収益性の確保が期待できることから、水田のフル活用や後継者の育成にも結びつくものと考え、共同運営する農家などと取組の拡大を検討している。



青森県

五所川原市



3 いでしま ひろあき 出島 博昭（秋田県大館市）

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
秋田63号	約1.8ha	881kg/10a	310kg/10a(571kg/10a) ※

※作況補正後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(夫婦中心)で経営する専業農家
- 米を中心とした複合経営

【作付品目】

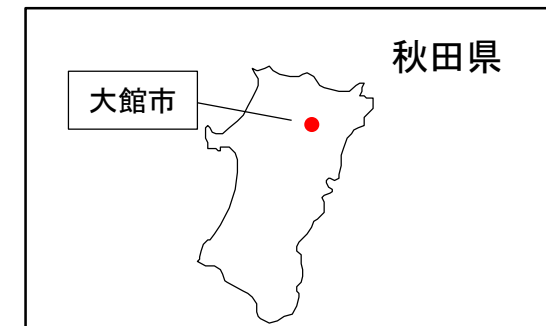
- ・主食用米:あきたこまち など 4.2ha
- ・飼料用米:秋田63号 1.8ha
- ・野菜:アスパラガス など 0.4ha

【取組のきっかけ】

- 飼料用米の交付金によって経営の安定化が図られることを期待して、飼料用米生産に取り組む。
- 品種については、地元JAからの勧めもあり、特認品種「秋田63号」を作付け。

【取組概要】

- 耐倒伏性に優れ、いもち病にも強く、地域での栽培に適するという特性を踏まえ、「秋田63号」を選定。
- 地元JAが運営する展示ほ場及び営農指導員から得た情報を参考に、土壌改良材を投入し土作りを行い、基肥として鶏糞+N5.6kg/10a、田植時に側条施肥でN3.6kg/10a、追肥はN1kg/10aを施肥し収量確保に努めた。
- コンバインを地域の農業者4人で購入し、機械コストの低減、省力化生産に取り組む。
- 主食用米はJA施設、飼料用米は自己保有施設で他品種の乾燥・調製後に行うことで、コンタミの防止に努めている。
- 作業競合が生じないよう、主食用米(早生品種)と飼料用米(晩生品種)の作業分散を実施。その際、晩生品種である飼料用米を先に播種・育苗・移植することによって、多収に必要な生育期間を十分確保。
- 元年産は、7月から例年より気温が高い日が多かったことから、こまめな水管理を行い、多収を実現。
- 地元JAからの依頼により自身のほ場を「秋田63号」展示ほ場として協力し、地域の飼料用米栽培の普及に貢献。



4 農事組合法人ふながわ 代表者 由井 久也（富山県下新川郡朝日町）

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
やまだわら	約5.0ha	820kg/10a	267kg/10a(553kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 地域の若い担い手の問題提起を機会として設立された集落営農組織から始まり、平成19年に法人化して発足
- 代表者: 由井 久也（よしい ひさなり）
- 組合員[R元]: 32名

【作付品目】

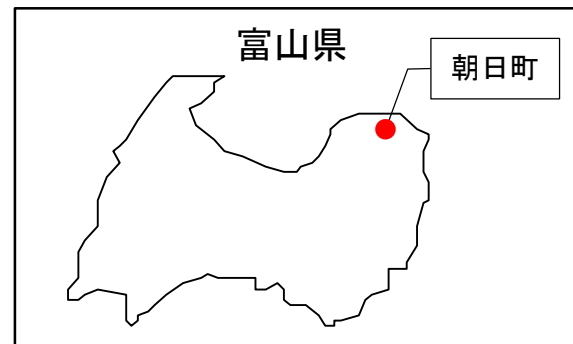
- 主食用米 35.8ha
: コシヒカリ、富富富
- 飼料用米: やまだわら 5.0ha
- 大豆: エンレイ 10.1ha

【取組のきっかけ】

- 平成27年に大区画ほ場整備（一筆1ha区画）をした際、飼料用米の作付を勧められ、「やまだわら」の作付を開始。倒伏しにくいことや作期分散が図れることが確認できたことから、種子生産体制の拡充にあわせて徐々に作付面積を拡大。

【取組概要】

- 土づくりを基本とし、ケイカルにリン酸、カリを加えた配合肥料（120kg／10a）、鶏糞（100kg／10a）を散布。また、コンポキャスタを導入して散布を効率化。
- 主食用米の移植栽培、主食用米の直播栽培、飼料用米の順で収穫できるように作付して作期分散。併せて、飼料用米のほ場を固定することと機械の清掃を徹底することで主食用米への混入を防止。
- ほ場の水管理を徹底し、令和元年度の猛暑や台風接近に伴うフェーン現象の影響を最小限に抑え、高単収を確保。
- 大区画ほ場の整備と飼料用米の団地化による効率化に加え、大区画ほ場に適した畦畔の傾斜が緩やかな耕作道（低段差緩傾斜耕作道）を整備して、大型機械の乗り入れやターンを容易にし、更なる効率化を実現。
- 除草剤は、業者とタイアップして、投げ込み式の大規模農家用製品を作製し、コストを低減。また、畦畔には芝を植えて畦畔除草の労力を軽減。



5 上田 隆 (秋田県横手市)

うえた たかし

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
ふくひびき	約2.3ha	819kg/10a	223kg/10a (596kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人、
田植時、臨時作業員1名)
- 主食用米・加工用米・飼料用米など、
米を中心として飼料作物の複合経営。

【作付品目】

- 主食用米・加工用米
あきたこまち 5.3ha
- 飼料用米
ふくひびき 2.3ha
- 飼料作物(青刈りとうもろこし) 1ha

【取組のきっかけ】

- 稲作作業の省力化とコスト低減を行うため、平成26年から実需者と契約を交わし、飼料用米の生産に取り組んでいる。

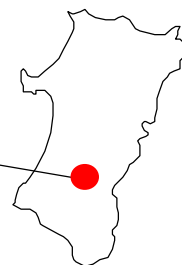
【取組概要】

- 短稈で耐倒伏性に優れ、穂重型の特性で多収品種の「ふくひびき」を令和元年産から作付けしている。
- 平成30年産は、分けつ時の低温で収量減となったため、令和元年産では密植(70株/坪)にして茎数確保を図っている。
- 多収及び省力化を図るため、基肥に安価な鶏糞ペレットを施用し、多収米専用コート一発肥料を飼料用米では18kg/10a施肥(主食用米ではN12kg/10a)、大型量販店から購入するなど生産コスト低減を図っている。
- 除草剤は田植機で田植えと同時に初期剤を散布し、その後の一発剤は飼料用米では1回として省力化を図っている。(主食用米では2回使用) また、雑草が発生したほ場の一部について、中・後期除草剤は使用せず、除草機を使用して生産コストの削減を図っている。
- 耕畜連携で近隣の畜産農家に稲わらともみ殻を提供している。もみ殻は、作業場の2階部分を改修してもみ殻収納庫にして搬出する際には、直接車両に落とし込めるよう工夫し、コスト削減と省力化を図っている。
- 出荷は、実需者がフレコンで直接運搬をすることから、包装容器代の削減や省力化、運搬経費の節減が図られている。



秋田県

横手市



6 小松田 光二（秋田県横手市）

品種	作付面積	単収	地域の単収との差（地域の平均単収）
秋田63号	約1ha	867kg/10a	245kg/10a（622kg/10a）※

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営（本人、配偶者、子息）
- 主食用米・加工用米・飼料用米を栽培する稲単作農家。

【作付品目】

- 主食用米・加工用米
あきたこまち 4.1ha
- 飼料用米
秋田63号 1ha

【取組のきっかけ】

- 農地集約による規模拡大を機に、需給調整を多収品種で取組むことによって安定した収入が見込める飼料用米に着目し、平成27年から実需者と契約を交わし、生産に取組んでいる。

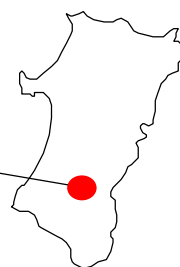
【取組概要】

- 耐倒伏性に優れ、いもち病に強いという特性を持つ多収品種の「秋田63号」を令和元年産から作付けしている。
- 苗の植付密度を50株/坪（地域の慣行は60株/坪）と疎植栽培し、10a当たりの必要育苗箱数を23枚から18枚に減らすことにより、播種、育苗、田植時の生産コストの低減及び省力化を図っている。
- 除草は初期一発剤を使用し、また、いもち病に強い品種を選定したことにより農薬の使用を控えるなど、生産コストの削減と省力化を図っている。
- 農地中間管理事業を活用して飼料用米作付けほ場を集約するとともに、主食用米とのほ場区画を明確に分けることで作業の効率化を図っている。
- トラクター、側条施肥田植機、コンバインは複数の農業者と共同利用している。また、集落で育苗センターを運営しており、個人の育苗用ビニールハウスが不要なことや、苗は地域の一般的な販売価格の半値程度に設定している。
- 出荷は、実需者がフレコンで直接運搬をすることから、包装容器代の削減や省力化、運搬経費の節減が図られている。



秋田県

横手市



品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
ミズホチカラ	8.5ha	615kg/10a	339kg/10a(276kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 平成24年4月に設立
- 経営主、配偶者及び常時雇用2名、期間雇用数名による経営
- 土地利用型作物のほか、レンコンを栽培

【作付品目】

- 主食用米:ヒノヒカリなど 7.3ha
- 飼料用米:ミズホチカラ 8.5ha
- 大豆:フクユタカ 10.8ha
- 大麦:サチホゴールデン 31.7ha
- レンコン 2.9ha



【取組のきっかけ】

- 平成27年産から、地域内の農業者の呼びかけにより5戸の農業者で飼料用米栽培を開始した。

佐賀県

白石町



【取組概要】

- 苗は自家育苗し、育苗中にローラーによる「苗踏み」を行うことで、茎が太く短く、根張りの良い健苗としている。これにより、移植後の活着や分けつが良くなり、高収量を実現している。また、疎植(16箱/10a:株間18cm:60株/坪)により、省力低コスト化にもつながっている。
- 施肥は基肥一発肥料8kgN/10a、硫安4kgN/10aに加え、近隣畜産農家に稲わら・麦わらを供給する代わりに牛糞堆肥3t/10aを無償で散布してもらっている。また、大豆後、レンコン後など肥料分の多いほ場に優先的に飼料用米を作付け。
- 飼料用米の販売契約先である養鶏業者に出荷する際に、各農業者が生産した飼料用米を各自乾燥後、フレコンバッグに入れて一時保管場所に集約し、そこで農産物検査後、共同で手配した大型トラックにより養鶏業者まで輸送することで、個々で出荷するより輸送費の削減を実現。
- (株)クボタのKSAS(営農支援システム)を利用したほ場管理、作業管理を行い、更なる効率化を図っている。

品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
ミズホチカラ	1.2ha	608kg/10a	324kg/10a(284kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営(本人と配偶者)
- 米・麦・大豆の複合経営

【作付品目】

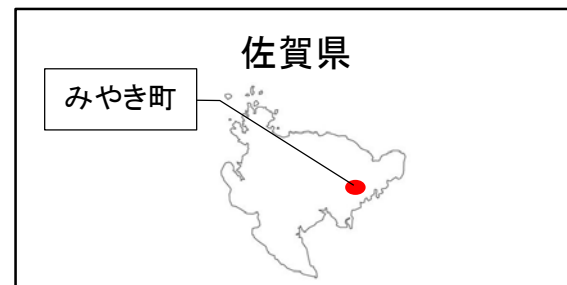
- 主食用米:さがびよりなど 6.9ha
- 飼料用米:ミズホチカラ 1.2ha
- 大豆:フクユタカ 3.1ha
- 小麦:チクゴイズミ、さちかおり 12.0ha

【取組のきっかけ】

- 平成27年産から、地域の養鶏業者の呼びかけをきっかけとして飼料用米栽培を開始した。

【取組概要】

- 飼料用米は、多収性で晩生の「ミズホチカラ」を作付けし、主食用米との作期分散を図っている。また、コンタミ防止のため、飼料用米作付ほ場は固定化している。
- 栽植密度は疎植(18箱/10a:株間18cm:60株/坪)とし、省力低コスト化を図っている。
- 施肥については、基肥として化成肥料11kgN/10aを施用し多肥栽培としている。また、生育状況を見て化成肥料4.8kgN/10aを追肥している。
- スクミリンゴガイ(俗称:ジャンボタニシ)の発生が多い地域のため、防除剤の使用と田植え後の浅水管理を徹底し、食害を抑えている。
- 乾燥後粳摺りした玄米はフレコンに入れ自己倉庫に保管し、農産物検査後、契約先の養鶏業者に出荷している。フレコン出荷とすることで省力低コスト化を図っている。



品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
ミズホチカラ	1.7ha	595kg/10a	311kg/10a(284kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 平成22年4月に設立
- 役員3名、社員1名及び常時雇用3名による経営
- 土地利用型作物のほか、タマネギ、キャベツ、アスパラガスを栽培

【作付品目】

- 主食用米:さがびよりなど 8.3ha
- 飼料用米:ミズホチカラ 1.7ha
- 大豆:フクユタカ 1.2ha
- 小麦:さちかおり 10.0ha
- タマネギ、キャベツ、アスパラガス 7.7ha

【取組のきっかけ】

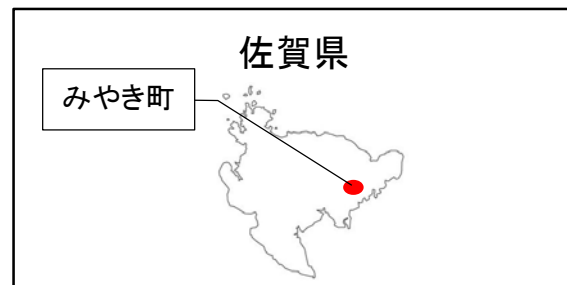
- 平成27年産から、地域の養鶏業者の呼びかけをきっかけとして飼料用米栽培を開始した。

【取組概要】

- 飼料用米は、多収性で晩生の「ミズホチカラ」を作付けし、主食用米との作期分散を図っている。
- 施肥については、基肥一発肥料6kgN/10aを側条施肥し、加えて硫安4kgN/10aを施用し多肥栽培としている。また、生育状況を見て追肥している。
- この地域は、砂質が多く水はけの良い土壌であるが、飼料用米「ミズホチカラ」については登熟期間が長いことを考慮し、なるべく水持ちの良いほ場に作付けするようにしている。
- 土地利用型作物と施設・露地野菜の複合経営を行っており、周年で労働力を確保しているため、飼料用米についても適期に肥培管理、病虫害防除ができる。
- 乾燥調製した粳をフレコンバッグに入れ、自家トラックで農産物検査場所に運び、検査を受けた後、契約先の養鶏業者に出荷している。フレコン出荷とすることで省力低コスト化を図っている。



(※) 令和2年4月から代表者を松永淳氏(写真)に変更



品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
ミズホチカラ	1.9ha	764kg/10a	320kg/10a(444kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 経営主、配偶者、子1名及び常時雇用1名による経営
- 土地利用型作物と養豚との複合経営

【作付品目】

- 主食用米:にこまるなど 10.1ha
- 飼料用米:ミズホチカラ 1.9ha
- 大豆:フクユタカ 6.0ha
- 大麦:はるしずく 13.0ha
- 小麦:シロガネコムギ 8.0ha

【取組のきっかけ】

- 平成28年産から、米穀卸売業者の呼びかけをきっかけとして飼料用米栽培を開始した。

【取組概要】

- 飼料用米は、多収性で晩成の「ミズホチカラ」を作付けし、主食用米との作期分散を図っている。苗は自家育苗しているが、「ミズホチカラ」は初期生育が遅いため、十分な育苗期間を確保し健苗としている。また、移植時は疎植(16箱/10a:株間20cm:50株/坪)とし、省力低コスト化を図っている。
- 施肥については、基肥一発肥料4.4kgN/10aと自家生産した豚ふん堆肥1.5t/10aを施用し、多肥栽培としている。また、生育状況を見て追肥が必要な場合には尿素を葉面散布している。葉面散布は、病虫害防除剤の散布と同時にブームスプレーヤで行い、省力化を図っている。
- 収穫した飼料用米は生粳のままJAのカントリーエレベータに出荷し、その出荷した飼料用米はJA系飼料メーカーで配合飼料となり、その飼料を給与し養豚を営んでいる。また、自家生産した豚ふん堆肥を飼料用米栽培に活用することで、資源循環型農業に取り組んでいる。
- 飼料用米を給与した豚肉はJA系統に出荷。「こめ豚」として販売されブランド化を図っている。



品種	作付面積	単収	地域の単収との差(地域の平均単収)
ミズホチカラ	4.3ha	545kg/10a	268kg/10a(277kg/10a) [※]

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 経営主、配偶者、父及び常時雇用1名による経営
- 土地利用型作物のほか、ジャガイモ、タマネギを栽培

【作付品目】

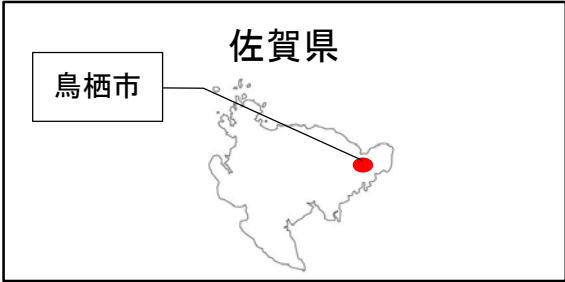
- 主食用米:さがびよりなど 12.5ha
- 飼料用米:ミズホチカラ 4.3ha
- 大豆:フクユタカ 2.5ha
- 裸麦、小麦 13.3ha
- ジャガイモ、タマネギ 7.9ha

【取組のきっかけ】

- 平成21年産から、地域の養鶏業者の呼びかけをきっかけとして飼料用米栽培を開始した。

【取組概要】

- 飼料用米は、多収性で晩生の「ミズホチカラ」を作付けし、主食用米との作期分散を図っている。また、移植時は疎植(16箱/10a:株間18cm:60株/坪)とし、省力低コスト化を図っている。
- 施肥については、基肥一発肥料4.8kgN/10aと汚泥堆肥7.3kgN/10aを施用し、多肥栽培としている。また、生育状況を見て硫酸2kgN/10aを追肥している。さらに、ジャガイモ後など肥料分の多いほ場に優先的に飼料用米を作付けしている。
- この地域は、用水が10月中旬で止まってしまうため、登熟期間の長い「ミズホチカラ」は水が切れないように、なるべく水持ちの良いほ場に作付けするようにしている。
- 乾燥後籾摺りした玄米はフレコンバッグに入れ、地域の複数農業者が共同で借りた倉庫に一時保管し、農産物検査を受けた後、契約先の養鶏業者に出荷している。フレコン出荷と保管場所を共同で借りることにより、省力低コスト化を図っている。



みぞぐち やすひろ
12 溝口 康博（佐賀県杵島郡白石町）

品種	作付面積	単収	地域の単収との差（地域の平均単収）
ミズホチカラ	3.3ha	579kg/10a	303kg/10a（276kg/10a）※

※作柄調整後の地域の平均単収

【経営概況】

- 家族経営（本人、配偶者）
（その他繁忙期に臨時雇用）
- 土地利用型作物のほか、タマネギ、イチゴを栽培

【作付品目】

- 主食用米：さがびよりなど 6.0ha
- 飼料用米：ミズホチカラ 3.3ha
- 大豆：フクユタカ 0.6ha
- 小麦：シロガネコムギ 9.6ha
- タマネギ、イチゴ 4.0ha

【取組のきっかけ】

- 平成27年産から、地域内の農業者の呼びかけにより5戸の農業者で飼料用米栽培を開始した。



佐賀県

白石町



【取組概要】

- 飼料用米は、多収性で晩生の「ミズホチカラ」を作付けし、主食用米との作期分散を図っている。栽植密度は、45株/坪程度の疎植栽培とし、種粃・育苗培土等の費用や、播種作業、水やりなどの管理作業を大幅に削減するなど、省力低コスト化につなげている。
- 施肥については、前作が麦の場合は、麦わらを全量すき込み、基肥として尿素を15kg～25kg/10a施用、更に追肥として尿素を15kg～25kg/10a施用。前作がタマネギの場合は、基肥は無施用で、追肥として尿素を15kg～25kg/10a施用している。
- 飼料用米の販売契約先である養鶏業者に出荷する際は、各農業者が生産した飼料用米を各自乾燥後、フレコンバッグに入れ、農産物検査を受けた後、倉庫で保管している。その後、養鶏業者が手配した大型トラックが各農家で保管されている飼料用米を集荷し輸送することで、個々で出荷するより輸送費の削減を図っている。
- 飼料用米の作付けほ場については、なるべく大豆等の畑作物転換ほ場に隣接しないようにしている。それでも隣接する場合は、当該畑作ほ場に湿害防止の額縁明きょを施工することで作付けの了解を得るなどの調整を行っている。